掲載日:2013年04月06日,面名:Y10YX0,記事ID:K20130406Y0Y10YX00001

(C)河北新報社

再生 せんだい

ひと模様

―― 53

一般社団法人東北お遍路プロジェクト理事長

新妻　香織さん(52)

「東北お遍路プロジェクト」は、東日本大震災で被災した福島、宮城、岩手、青森の沿岸部に、犠牲者への鎮魂と災害の記憶を伝える祈りのルート創設を目指す。相馬市議の新妻香織さん(52)は昨年12月、有志による組織を一般社団法人化し、理事長に就任。事務局を仙台市に置いた。四国八十八カ所巡礼にならい、「1000年先も語り継がれる場所」を選んで被災地をつなぎ、東北に人を呼び込み活性化を図りたいという。

会発足は震災があった2011年の9月。エチオピアに植樹する「フー太郎の森基金」など、国内外の環境保全活動に尽力してきたフリーライターの新妻さんが自身の人脈を生かし、仙台市内の異業種交流会員らの賛同を得た。昨年暮れに団体を一般社団法人化し、メンバー13人が理事などに名を連ねた。

誘客図り復興

震災直後は一般市民として、地元の避難所でボランティア活動に専念していた新妻さん。相馬港に近い自宅は、高台にあったため津波を免れたが、実家は流失した。同級生4人が亡くなるなど、海沿いの古里は壊滅的な被害を受けた。

「政治活動より市民活動」が新妻さんの信念だった。しかし「復興計画策定をはじめ、地元の将来を決めるこの時期に、議員としても関わらなければ絶対後悔する」と一念発起。11年11月の相馬市議選に挑み、上位で初当選を果たした。

祈りと記憶を語り継ぐ

津波被災地から「巡礼地」選定

「原発事故にも見舞われた東北が再び観光地として復権するには、全国から足を運んでもらう動機付けが必要になる。『被災地を観光地にするのか』という批判もあるかも知れないが、なりわいを維持するための観光誘客も立派な復興への手段となる」。新妻さんはプロジェクトの狙いを語る。

候補地を公募

昨年11月、巡礼地の暫定候補として、90カ所を選んだ。各自治体1カ所以上を基本に、津波被害を後世に伝え、復興のシンボルにふさわしい場所を1年近くかけて計56人から公募。てが乏しかった岩手、青森には各地に直接足を運び、趣旨を説明して回り、応募者を増やした。

一方で、児童・教職員84人が死亡・行方不明になった石巻市の大川小は、遺族から反対の声があり、候補地に入れていない。加えて、現在ある遺構が将来的に存続されるか分からない箇所もあり、選定はあくまで暫定だ。

今月からメンバーが候補地を再訪。地元に事業への理解を深めてもらう。

息長い活動に

新妻さんは「拙速に決めるつもりはない。震災からまだ2年で、遺族や被災地の感情が癒えるにはもっと年月が要る。精査と入れ替えを繰り返しながら、確定には10年程度の長いスパンで臨みたい」と話す。

その間、事業の一層の周知と盛り上がりが欠かせない。先月には、昨年末から公募した147点の中から公式ロゴマークを決めた。6月16日には「第1回東北お遍路杯」として、相馬市でPRを兼ねたマラソン大会を開く。5キロと10キロの2部門に900人の参加を募っている。

「犠牲者の慰霊のためにも、『こころのみち』としてお遍路を創設し、東北へ思いを寄せる人と被災地をつないでいきたい。各被災地での記録を伝え、後世に語り継ぐ責任がある」と息の長い活動を見据える。

＝土曜日掲載

相馬市の自宅近くで、東北お遍路の暫定候補地に選んだ津神社の前に立つ新妻さん